

保育者養成における古典文学教材の価値

——対人援助職に求められる自己覚知の導入教育——

高野 浩

一、はじめに——保育者養成の課題——

平成二十九年三月に告示され、平成三十年四月より施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂の趣旨として、三歳以上の子どもについての「幼児教育の共通化」、小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」に加えて、子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の『質』の方向性」があることを無藤隆氏は指摘している。¹⁾この質の向上について、無藤氏は「小学校以上の学習指導要領では、「これをやりなさい」という指導の内容が比較的、具体的に書かれています。それに対して幼稚園教育要領や保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領は、具体的な内容も一部ありますが、そこで記されているのは、かなり理想的な方向性です。そして、そこに向けて努力し改善していきましょう、と示しています。²⁾と述べている。こうした点に鑑みると、一人ひとりの保育者が子どもや子育て家庭の状況・状態に応じ、必要な事柄を把握し、適切な援助や支援を実施できることがより強く期待されていると考えられるだろう。その点からすれば、保育者一人ひとりの資質の向上が見通されることになり、保育者養成の現場においてもよりいっそう保育

学生の資質向上に努めることが求められることになる。

ところで、保育者とは子どもの育ちや家庭での子育てを支援する存在であるという点で対人援助職の一つであると言えるだろう。対人援助職の基本は、援助や支援を受ける側（利用者）を主体としてとらえ、利用者の立場からその生活をより良いものにしよとする支援をすることにある。つまり、援助者としての自己ではなく利用者をこそ主体としてとらえる姿勢の獲得・定着が欠かせない。前述のごとく、保育者が子どもや子育て家庭について理解し、それに合わせた援助や支援を実現していく必要がある以上、その前提として利用者を主体として考える姿勢の定着も図られなければならないことになり、保育者養成校においては、そうした面での資質向上に向けた教育の充実化が必須になる。

本稿では、以上のような事柄をふまえた上で、教養科目「文学」の時間における古典文学学習について検討する。主体の置きどころを援助者から利用者に移行できる素地の育成、すなわち自己と他者の読みの違いの認識によって、自己中心的なあり方の自覚と、他者の立場に立つことの重要性の認識を古典文学の学習が実現しうることを確認する。そうして自身の実像を知り、より良い方向へと自身を成長させて

いく自己覚知へと導いていくことができる点で古典文学の学習が価値を有し、保育学生の資質向上に寄与しうることを述べる。

二、他者主体の姿勢の重要性と自己のありようについての自覚

まずは前項でもふれた対人援助職のあり方について概観しておく。かつて福祉領域では「指導」という言葉が支配的だったが、そこから「援助」や「支援」へと用語が転換され、福祉業務に従事する人の仕事のあり方が改められて久しい。諏訪茂樹氏によれば、そうした動きとともに「指導者」という位置づけは消え、看護婦やソーシャルワーカー、カウンセラーなど、福祉に従事する専門職は「対人援助職」と総称されるようになり、福祉サービスを受容する人は「利用者」、「クライアント」と呼ばれるようになった。こうした転換の背景には、従来の、指導する側、指導される側という上位・下位の関係から、援助サービスを提供する側、利用する側というような並列の関係へと、その枠組みを変えろという意図があったとされている。³⁾

古川孝順氏は「わが国における福祉改革、なかでも社会福祉基礎構造改革において強調されたことの第一点は、社会福祉の供給システムから利用者本位の供給システムに転換するということであった。それは、社会福祉における利用者民主主義の確立といってもいいし、もっと端的に利用者権の確立といいかえてもよい。」と述べているが、利用者の側に主体を置く考え方への転換は、援助者のあり方にも変容をもたらすことになる。対人援助職に就く者、またこれから就こうとする者の利用者へのあり方の見直しである。一九六〇年代から七〇年代にかけて登場し、現在の一般的な社会福祉モデルとされる「生活モデル」の中身を一瞥してみても、援助者にいかようなあり方が期待され

るようになったのかがうかがえる。

「生活モデル」は、それ以前に登場していた、利用者が抱える問題の理由や背景の調査にもとづいて処遇の方針を決定し、援助を実施するという「医学モデル」の批判的モデルとして登場してきたとされる。その内実は、利用者の抱える問題を治すべきものとしてとらえるのではなく、利用者自身が環境に適応できるような力を高めながら、環境もまた利用者に対して対応していく、という考え方であるという。⁵⁾ こうした内容からは、援助やサービスの提供者・援助者主体というあり方から、利用者主体のあり方へとの変容が迫られることになる。それはつまり、利用者について援助者がより深く理解するという変化を促すものであるということだ。そうであるとき、利用者に接する際に援助者に求められる基本的な意識や態度の教育はその根幹をなすものとなり、対人援助職従事者の養成においても重視されるべきものとなるだろう。

ここまで社会福祉の領域で利用者重視の姿勢へと移行していった流れについて、甚だ簡単にはあるが概略をまとめたが、こうした点はソーシャルワーク等の分野に限らず、保育士（もちろん社会福祉の領域に属する職である）や幼稚園教諭、すなわち保育者養成課程においても十分に考えられなければならないことである。実際のところ、保育の現場において、子ども理解はもちろんのこと、保護者理解にもとづく支援の重要性は高まっている。それだけに保育者養成にあっても対人援助の際に求められる利用者主体の姿勢定着を図るための教育が望まれることになる。その際、まず必要になるのは他者である子ども・利用者に向き合う姿勢の転換であろう。自分は大人だから子どものことが分かるなどといった無批判的な捉え方から、子どもや利用者を他者として明確に位置づけたうえで、個々人について知ろう、理解しようという姿勢の獲得が望まれることになる。すなわち他者理解の姿勢

の定着である。

こうした他者理解の姿勢獲得の問題を考えるにあたって重要になるのが自己理解である。

部分的・一時的にしか接触しない人を理解しようとすれば、相手への認知は一面的になりがちです。しかも、限られた情報から、できるだけ早く合理的に、相手の全体像を捉えようとするために、しばしば私達は紋切り型のステレオタイプ (stereotype) に依存することになります。

ステレオタイプとは、例えば「眼鏡をかけている人はインテリだ」とか「ラテン系の人は陽気だ」というような、対人認知のための単純化された枠組みです。このような枠組みは、私達の対人認知を容易にしていますが、その固定的で画一的な働きが、相手をありのままに認知する上での障害ともなるのです。特に、優劣や善悪といった価値判断を伴うステレオタイプは、特定の人々への偏見や差別にも結び付きます。そのために、自分が持っているステレオタイプは十分に自覚しておく必要があります、事実的反証を冷静に受け入れられるような、柔軟な枠組みにしておくことが大切です。

右に引用した諏訪氏の指摘のごとく、ステレオタイプに依存した物の見方や人のとらえ方は、事実誤認を生じさせるものである。そうしたことから、他者を理解しようとするためには、まず自らの内にあるステレオタイプや自己の限られた経験に基づく理解、また自己の常識に根差した理解に対して批判的なまなざしを向けることが欠かせない。自身がそうした色眼鏡を通して事物や人を見がちであるということとを意識することから始めなくてはならないということだ。それらに

自覚的であることで、はじめて他者理解を深めるステージに進めることになる。

ありのままに物事をとらえることは案外難しいものだとということを手がかりに意識するような経験が保育者養成の段階においてなされることし何度も経験することで、より強固に定着していくものである。この点からすると、養成校での授業の時間内にそれらを繰り返し経験する機会があることが望ましい。そして、その時間は必ずしも養成課程の専門科目である必要はない。教養科目においてもそれらは達成されるはずである。そこで、本稿では文学の授業における他者理解のための自己理解の教材について検討したい。中でも、古典文学の学習に焦点を絞っていく。古典文学に焦点化するのには、時代の違いが必然的に存在し、現代人の常識に根差した理解では作品成立期の理解との間に大きな齟齬が生じてくることによる。この差異に学習者が着目することで、自己に内在するステレオタイプの視点に自覚的になることができるのではないかと考える。

以下、そうした観点を交えながら古典文学作品の具体的な場面を検討しつつ、その教材価値について述べることにする。

三、作品成立期の読者と現代の読者の読みの差異

本稿で取り上げる古典文学作品は『源氏物語』である。『源氏物語』を素材とするのは、およそ一千年前に作品が成立しており、時代的な懸隔があること、また、中学・高校段階で冒頭文の音読・暗記教材とされたり、国語科教材としても教科書に採用されたりするなど、学習者に一定のなじみがあることによる。さらには、広くその存在が知られている一方で、学習者が作品に持っているイメージは作品そのもの

の読解から得られたものであるとは限らないことも理由の一端としてある。

そうした点をふまえつつ、以下、『源氏物語』第一部において、光源氏が栄華を獲得していくまでの道筋をたどるかたちで、主要な場面について検討していく。取り上げるのは、次のような場面である。

- A 冒頭文(桐壺卷)
- B・C 他の後妃らの嫉妬心と桐壺更衣への迫害(桐壺卷)
- D 光源氏と藤壺の密通(若紫卷)
- E 夜居僧都による出生の秘事の密奏(薄雲卷)

まずはAの場面である。

A いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。(①桐壺・一七)⁷⁾

『源氏物語』の首巻桐壺巻の書き出しの一文である。前述のごとく、中学や高校の国語の時間には古典文学作品の音読・暗記が指示されることが少なくないが、その際にもよく取り上げられる一節だ。

「いづれの御時」とは、主人公光源氏の父であり、桐壺帝と称される天皇の御代を指すのだが、それと明示せず臙化した表現になっている。「女御、更衣」は天皇の後妃を指す言葉だ。現代は一夫一婦制になっているが、当代は一夫多妻の時代であり、天皇の後宮には複数の后妃が存在することも珍しくはない。それら后妃には主として出自に関わるランクが存在し、「女御」は上位に、「更衣」は下位に位置づけられた女性たちである。物語は、桐壺帝の後宮には大勢の後妃が存在する

中で、身分はさほど高くはないものの、とりわけ帝の寵愛を受けた女性がいたことを明かしている。この女性が光源氏の母、桐壺更衣である。このように、まずは桐壺帝と桐壺更衣の愛の物語として『源氏物語』は始まっている。

さて、この箇所について現代人はどのように受け止めるだろうか。冒頭文の示すところからすれば、ある帝の御代において、後宮に大勢の後妃がいたが、その中でさして身分の低い女性が、帝から格別の寵愛を被っていた、といった状況設定ならびに、登場人物の紹介のような一文として理解することになるだろう。

しかし、『源氏物語』成立期の読者、すなわち平安期の読者はこれ以上の情報をこの一文から汲み取ったであろうと考えられている⁸⁾。その作品成立期の読者が受け止めた情報、理解とは、冒頭から大変な状況が出来ていると予見させるしくみになっているというものである。以下、その概略を三谷邦明氏、山本淳子氏の説明に基づきながらまとめておこう。

『源氏物語』が成立した平安中期は藤原氏による摂関体制が確立、定着していく時期である。摂関政治の基本的な構図は、有力貴族らが自身の娘を天皇や東宮に入内させ、その娘に天皇の皇子を産ませ、その皇子が皇位に即くことで外祖父として権力を手中におさめるというものだ。そうした中で、天皇は自分の好みだけで特定の後妃を、しかも身分の低い后妃を厚遇することは憚られることになる。娘を入内させることの背後に権力の掌握という期待が潜んでいる以上、誰もが自身の娘の厚遇を望むことになる。そうした中で身分の低い后妃が、身分の高い后妃を出し抜いて厚遇されるということは、その身分の高い后妃の父やその一族が不満を抱えることにもなりえる事態なのである。誰かが帝に厚遇されるということは、その厚遇された者の妊娠の可能性が高まるということだ。それは相対的に自分の娘の妊娠の可能

性が低下することをも意味するのであり、権力獲得を夢見る他の有力貴族の不満は当然のものなのだ。まして三谷氏が述べるごとく「天皇は、身分に応じて后妃を愛さなければならないのに、その帝王学をやぶって、一人の後妃を寵愛してしまった」のであるから事は重大だ。そうした先に見通されるのは、政情不安に他ならない。当代の政治システムの頂点はたしかに天皇ではあるのだが、天皇専制の時代というわけではない。むしろ臣下の貴族らと協力しながら合議的に政治は行われている。そうした中で、不満を抱える貴族が増えるようでは治世の安定は図れないのである。そうしたことをふまえれば、身分の低い后妃が他の后妃よりも厚遇されているということを示す冒頭文は、きわめて不安定な状況が生じていることをも予見させる一文になる。

作品成立期の読者は、当代のシステムの中に生きている以上、そのように受け取ることができたはずだ。現代人が、自身を取り巻く環境を背景に据えて読み取るものとは大きく異なる読みということになる。三谷氏が「源氏物語では、物怪や神異など、今日の目で見れば超現実的なできごとがえがかれていないわけではないのですが、それらは平安朝の知的・感性的常識であり、『源氏物語』は一貫して現実なるものを追求しており、それは、なぜという論理で、主題意識を持つたからにはかならないのです。なぜ中宮がないのか、という疑問や、天皇に一人の後妃が愛されるならば、その女性は他の后妃の恨みをおうだろうという想像などは、現在の読者の常識からは生れません。有職故実といわれている古典文学を読むための基礎知識が要請されるのはそのためで、なぜという論理から導き出された源氏物語のリアリズムを理解するためには、平安時代の知的・感性的常識をできるだけ深く獲得する必要があります。」と述べているとおり、わずかに一文ではあるが、作品成立期の読者の読みと現代の読者の読みとの間には大きな懸隔が存在するのである。認知の問題を扱う際にしばしば取り

上げられる多義的な絵画『妻と義母』¹⁰同様に、自己と他者の対象理解の違いを見て取ることができるということだ。

『源氏物語』の冒頭文の解釈においてみられるこのようなズレに着目するとき、学習者は自分の生きている現代という時代の常識に依拠して読み込んでいたことに気が付くことになる。そして、同じものを読みながらも、自身とは違う受け取り方をする人間の存在を意識することにもなるだろう。その意味で、冒頭文一つをとっても、いかに自分が自己の常識の範疇から物事をとらえているのか、ということへの自覚を呼び起こすことができると考えられる。

物語はこの後、桐壺更衣に対する他の后妃の妬みや嫉みを描き出す。

B はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。朝夕の宮仕につけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすあはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。(①桐壺・一七)

格上の后妃である女御らが不愉快に思い、憎み蔑んでいること、同格の他の更衣らは女御以上に寵愛が期待できないだけによりいつそう気持ちがおさまらない状態にあったことが明かされている。そうした恨みをかう状況から、桐壺更衣は体調に支障を来たし、里下がりか度重なるようになったという。しかし、そうなればなるほど帝は桐壺更衣を不憫に思い、他人の非難に耳を傾けることもなく、世間の悪例にもなりかねないほどに厚遇は続いたとする場面である。

他の后妃の恨みは、この後の光源氏誕生の場面以降にも見られるも

のである。ここでは、桐壺更衣に対する憎しみが、具体的ないじめにまで発展したとして表現されている。

C 御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のこかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾たへがたくまなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。(①桐壺・二〇)

帝の御召しがあつて桐壺更衣が御局の桐壺から清涼殿に移動する際、他の后妃の居室の前を通ることになる。その姿を見て后妃やその女房らは平静ではいられない。通り道に汚物を撒き散らしたり、廊下の両端の扉を閉ざして閉じ込めたりするなどのいじめがあつたという。

こうしたBやCに見られるねたみやいじめの場面をめぐって、女としての屈辱感が根底に潜んでいるという読みでは不足がある。先述のごとく、各后妃は皇子を出産し、権力獲得の礎になるといふ家の期待を背負って入内してきているからだ。摂関期に生きる者は、こうした語りの背後にある政治の問題を見通すこともできたはずである。そうしたなかで、現代に流布する「女は怖い」といった単純化した見方が持ち込まれて読まれるのであれば、そこにも作品成立期の読者との懸隔が顕現することになる。そもそも「女は怖い」という類型化したものの方そのものがステレオタイプの一例であることは疑いようのないところでもあり、多層的に自身のものとのとらえ方に向き合うことができる場面でもあると言えよう。

その後、桐壺更衣の死去、また桐壺更衣の母の死去が語られ、身寄りのない光源氏は桐壺帝に引き取られることになる。光源氏は類稀な美貌と才能を示しながら成長するが、「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」(①桐壺・三九〜四〇)という高麗人の観相を経て、賜姓源氏となり、臣下としての生を歩むことになる。

一方、桐壺帝は亡き桐壺更衣を忘れられずに過ごしている。そうした中で、桐壺更衣に容貌がよく似た先帝の姫宮の存在が帝付きの典侍によって明かされ、帝の申し入れにより入内する運びとなる。この姫宮が藤壺である。母を亡くした光源氏にとって、その容貌が酷似しているという藤壺の存在は特別である。幼心にも懐かしさを覚え、憧憬の念を強めていく。父の桐壺帝は、光源氏が藤壺を母親に見立てるのも無理からぬこととし、藤壺に親交を深めることを依頼し、両者は距離を縮めていくことになる。

しかし、時の経過を経て、光源氏の藤壺に対する思いの変化が同じ桐壺巻で語られることになる。既に左大臣の娘・葵上と結婚をした光源氏であるが、なかなか親しむことができず、むしろ藤壺に対する思いは強まりを見せている。「さやうならむ人をこそ見め」(①桐壺・四九)とあるように、その思いは幼少期に見られた母を慕う気持ちから、一人の女性として思慕するあり方へと変容していく。この思慕の念の高まりが若紫巻で事件を引き起こすことになる。

D 藤壺の宮、なやまたまふことありて、まかだたまへり。上のおほつかながり嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにもまうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれ

づれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いか
がたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とは
おぼえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに、
世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したる
に、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうら
うたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなし
などのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにう
ちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思さるる。

何ごとをか聞こえつくしたまはむ、くらぶの山に宿もとらま
ほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。
見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身と
もがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

^イ世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても
思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ、
御直衣などはかき集めて来たる。(①若紫・二二〇～二二三)

Dは藤壺の里下りのタイミングを利用して、光源氏が三条宮に忍び
込み、藤壺との逢瀬を遂げる場面である。藤壺は光源氏の侵入に困惑
し、再度の逢瀬(傍線部A)「あさましかりしを思し出づるだに」とあ
り、初度の逢瀬があったことが想起されるが、現行に流布する『源氏
物語』中には初度の逢瀬は記されていない)を許してしまった自らの
運命に痛恨の思いを抱え、嘆いている。それでも優しいその姿は光源
氏をいっそう惹きつける。と同時に、馴れ馴れしくもなく、奥ゆかし
く気品ある姿を藤壺は見せ、光源氏はあらためて理想的な女性像を藤
壺に見出すことになる。そして、もしも藤壺にわずかでも欠点がある
ならば、嫌いにもなり、自身も藤壺も悩むことなどなかったのに、と

恨めしい思いすら抱いている。そうした両者の複雑な心中が和歌の贈
答というかたちで示された直後、王命婦が光源氏の衣服を取り集めて
きたことが記される。夜明け間近ということで、早く服を着て退出す
ることを光源氏に促すことを示す一文である。この王命婦の行動を記
すわずか一文によって、間接的に光源氏と藤壺の間に肉体関係が持た
れたことがわかる仕組みになっている。福嶋昭治氏はこの一文につい
て、『源氏物語』には、露骨な男女の逢いの場面の描写はまったく
ありません。だからといって、いわゆる王朝絵巻の雅やかなイメージ
ばかりの物語であるかというところがそういものではないのです。ちよっ
とゾクツとするような、生々しさや実在感にあふれた描写で満ちてい
る物語なのです。^①と述べている。福嶋氏のこの説明は、『源氏物語』
がセクシャルな描写を含んだ作品だという一般的な誤解があることを
前提にしたものであろう。高校までの授業等で断片的にしか『源氏物
語』にふれたことのない学習者が、性的な描写が実はないという事実
を知ることが、自己に向き合う契機をも与えてくれるはずである。『源
氏物語』そのものについてのイメージが福嶋氏が前提としていたと思
しいものであるならば、学習者は自身が事実とはかけ離れた思い込み
をしていたことに気が付かされるはずだ。おそらくは、恋愛の物語、
光源氏が多く女性の女性と関係を持つ物語という世間に流布する『源氏物
語』のイメージに左右された結果であることを知ることになる。つま
り先入観にここでも向き合うことになるということだ。

さて、このDの場面でもう一点注目したい点がある。それは二首目
の藤壺詠歌中の傍線部イ「世がたりに人や伝へん」についてだ。世間
の人がこの逢瀬を噂して伝えていきはしまいか、という不安が詠み込
まれている。なぜ藤壺はこの事実が漏れ伝わることを恐れるのかとい
うこと理由を見誤ると大きなズレが生じる箇所である。この場面を、
父の後妻(義母)と継子とが肉体関係を結んだととらえたとすれば、

家中の倫理的な問題に理解は落とし込まれることになる。しかし、この場面で藤壺が想定しているのは、藤壺の立場からの夫や光源氏の立場からの父に対する裏切りというものではないだろう。后妃が臣下と関係を持ったということにこそ眼目がある。欺かれたのは帝であり、国家の中心的存在なのだ。だからこそ、この密通という事実が露顕すれば、国家的一大事にまで発展することは必至で、自身も光源氏も全てを失うことになることが予想され、恐れ慄くのである。天皇を中心とした社会の中で生きる作品成初期の読者は、このように読み込んだと考えるのが自然である。

では、現代の読者はどうであろうか。木村朗子氏は自身の授業時の受講生のコメントを著作の中で紹介しているのだが、その中に「よくよく考えて見ると光源氏と藤壺の関係ってものすごいスキャンダルですよ。」というものがある。このコメントの「よくよく考えて見ると」という箇所からは、当初は家中の倫理的問題としてこの密通事件をとらえていたことがうかがえる。現代的な感覚にのみ依拠して読まれる可能性が多分にあることを浮き彫りにしていると言えよう。そうであるとするならば、この場面も現代を生きる自分と他者たる作品成初期の読者との対比について考える契機になりうるのだ。

国家的スキャンダルとして読むのか、家中の倫理的問題として読むのかという問題は、その後の物語の読みにも関係してくる。この密通ののち、藤壺は懐妊し、やがて出産をすることになるが、その子どもの父親は光源氏だったことが明かされるのだ。もちろん、その事実は藤壺と光源氏、手引きをした王命婦にしか分からないものになっている。桐壺帝は懐妊を大いに喜ぶが、それを見る藤壺や光源氏の胸中には不安が渦巻くことになる。この不安の根底には、露顕すれば国家的スキャンダルにもなるような事実を抱えていることからくる苦しさがあふれている。しかし、家中の倫理的問題としてとらえていくと、その重苦し

さの度合いは幾分なりとも薄まらざるを得ないだろう。つまり、密通を犯した二人の、とりわけ藤壺の心中を推し量ろうとするとき、大きな落差が生ずることになるのだ。

さて、この密通事件はさらなる衝撃的な展開をみせる。密通の末、藤壺は懐妊し、皇子（のちの冷泉帝）を産むことになる。他言できるはずもない出来事ゆえ、出生の秘事は当事者である光源氏、藤壺と密通の手引きをした藤壺付女房の胸の内にもみ留め置かれ、皇子は桐壺帝の子として養育されることになる。その後、治世は桐壺帝の御代から、光源氏の兄朱雀帝の御代を経て、不義の子たる冷泉帝の御代へと移っていく。光源氏の手厚い後見もあり、冷泉帝の御代は聖代とも称される安定した時代となった。しかし、薄雲巻に至るとにわかには事態は急変する。真相を知ることなく成長した冷泉帝に出生の秘事が内密に奏上されるのである。以下、少々長くなるが、その密奏場面を掲げる。

E 静かなる暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ世の中のこともども奏したまふついでに、「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらずと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終はりはべりなば、何の益かははべらむ。エ仏も心ぎたなしとや思しめさむ」とばかり奏しきして、えうち出でぬことあり。

上、何ごとならむ、この世に恨み残るべく思ふことやあらむ、法師は聖といへども、あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあるものを、と思して、「いはけなかりし時より隔て思ふことなきを、そこにはかく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」とのたまはすれば、「あなかしこ。さらに仏のいさめ守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなく弘め仕うまつり

はべり。まして心に隈あること、何ごとにかはべらむ。これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、後の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべてかへりてよからぬことにや漏り出ではべらむ。かかる老法師の身には、たとひ愁へはべりとも何の悔かはべらむ。♫仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。わが君孕まれおはしましたりし時より、故宮深く思し嘆くことありて、御祈禱仕うまつらせたまふゆゑなむはべりし、くはしくは法師の心にえさとりはべらず。事の違ひ目ありて、大臣横さまの罪に当たりたまひしとき、いよいよ怖ぢ思しめして、重ねて御祈禱どもうけたまはりはべりしを、大臣も聞きしめしてなむ、またさらに事加へ課せられて、御位に即きおはしましまで仕うまつることどもはべりし。そのうけたまわりしさま」とて、くはしく奏するを聞きしめすに、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり。とばかり御答へもなければ、僧都、進み奏しつるを便なく思しめすにやとわづらはしく思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召しとどめて、「カ心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍びこめられたりけるをなむ、かへりてうしろめたき心なりと思ひぬる。またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」とのたまはず。「さらに。なにがしと王命婦とより外の人、このことのけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。♫天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。いとさなくものの心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ、♫やうやう御齡足りおはしまして、何ごともわきまへさせたまふべき時にいたりて咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世よりはじまるにこそはべるなれ。♫何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さら

に心より出だしはべりぬること」と泣く泣く聞こゆるほどに明けはてぬれば、まかでぬ。 (②薄雲・四四九〜四五二)

奏上したのは、代々藤壺の家に仕えていた祈禱僧（夜居僧都と呼称される）である。当初は言いよんどでなかなか切り出せずにいるが、冷泉帝に促されるかたちで秘事を語り、真相にふれた冷泉帝は恐れおののくことになる。

この場面で注目したいのは夜居僧都の密奏の動機である。傍線部ウ「知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるること」、エ「仏も心ぎたなしと思しめさむ」、オ「仏天の告げあるによりて奏しはべるなり」とあるように、「天」や「仏」、「仏天」の語が繰り返し用いられている。これは僧都自身が秘密を抱えていることの個人的問題を超えて、仏教的観点から密奏をしなくてはならないということを示すものである。引用部分の後半にも、傍線部キ「天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり」とするよう「天変」の語が見え、やはり仏天の存在が問題になっている。これに続くのが、傍線部ク「やうやう御齡足りおはしまして、何ごともわきまへさせたまふべき時にいたりて咎をも示すなり」という箇所であるが、冷泉帝が成人し、分別がつく年頃になったがゆえに、自身の出生の経緯を知らないうちのことを仏天が咎めるようになり、天変地異もしきりにおこるようになったのだ、と僧都は述べている。つまり、仏天が天変地異のかたちをとって咎めだてている対象は冷泉帝自身であるとすのだ。同様に、僧都は傍線部ウ「知ろしめさぬに罪重くて」、ケ「何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより」と述べ、「罪」が冷泉帝のものであることを伝えている。冷泉帝に罪があるがゆえに、それを案じて僧都は密奏を決意したので。

この場面について現代の読者は、冷泉帝に罪があるとされる点に疑

問を抱くことになるだろう。子は親を選べるわけではないし、不義密通の子であることを本人が望んでこの世に生を受けたわけでもないと考えられるからである。そのように考えれば、冷泉帝に罪はなく、責任の所在はむしろその親たる光源氏と藤壺に求められるのが至当ではある。しかし、作品成立期の読者は異なる解釈をしたと思しい。その鍵になるのが仏教である。ここでいう冷泉帝の罪とは仏教における「不孝の罪」と呼ばれるものであり、親孝行がなされないことを問題視するものである²³⁾。実父を知らなければ親孝行はできないことになるという仏教的論理がここにはある。このことは真相を知るに至った冷泉帝自身が傍線部カ「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけること」と述べているように、知らないままでいれば、帝自身の来世にかかわる問題であった。仏教が支配的な平安期にあつては、現世の行いが来世に影響を及ぼすという考え方は常識的なものであり、冷泉帝に罪があることについても自然に受け入れられたことだろう。

こうした理解のズレは、ごく些末なことのようは一見思えるかもしれないが、後の物語展開にも大きく関わるものである。この後、冷泉帝は光源氏への譲位を検討するが、その理由は実父光源氏が臣下として自らに仕えているという父子の立場が逆転している現象に思い悩むからである。譲位自体は、光源氏自身が固辞したことにより実現しないが、藤裏葉巻で准太政天皇の待遇を冷泉帝が光源氏に対してとることにより、父子の立場逆転の構図は解消され、同時に先述した高麗人による光源氏の観相結果がここにおいて実現したことが分かる流れになっている。そうした流れの中にあつては、冷泉帝自身が罪障意識を抱くことは欠かせないものであり、仏教的視点が基盤になくはその後展開も成立しえないものになっているのである。子に罪はなく非は親の方にあるという考え方から離れ、冷泉帝の仏教的罪業に思いを

致すことができなければ、譲位までも想起する冷泉帝の心理にはふれすることはできないだろう。

このように、現代的な見方、現代人の常識を持ち込んで読む『源氏物語』と、平安期の人々の実相をふまえて読む『源氏物語』とは大きな隔りがある。この隔りに気が付くことで、他者たる作品成立期の読者との違いを認識し、自分自身が自己の常識や感覚に依拠して物事をとらえやすい存在であるということにも思い至ることができるのではないだろうか。

四、古典講読における自己覚知

——ジョハリの窓の観点から——

ここまで『源氏物語』第一部の流れを追いつつ、いくつかの主たる場面を取り上げ、現代的な視点や常識にのみ依拠した読み方では作品成立期の読者の読み方との間に齟齬が生じることを確認した。それは現代に生きる自己にのみ主眼を置いた読み方と平安期を生きた他者の読み方との間には大きな差異が生じる余地が多分にあり、ともすれば現代の視点のみでとらえると身勝手な作品理解に至る可能性があるということである。すなわち、ここには自己と他者の問題が介在している。それだけに、このような問題意識を喚起しながら古典文学の講読授業を展開することで、自分自身が常識だと考えていることがいつも適用可能なものではないことを知り、自己の常識に依拠しすぎることの危険性にも気が付けるようになるのではないだろうか。この点について、「ジョハリの窓」の概念を用いて検討しておこう。

「ジョハリの窓」は、ジョセフ・ラフトとハリー・インガムによって作られた対人関係における気づきのモデルグラフである。「自分自身が知っている自分」、「自分自身が知らない自分」、「周囲が知っている

る自分」、「周囲が知らない自分」の四項目を組み合わせ、「自分自身も他人も知っている自分」開放の窓、「周囲だけが知っている自分」盲目の窓、「自分だけが知っている自分」秘密の窓、「自分も周囲も知らない自分」未知の窓」という四つの窓を想定し、「自己開示」や「他者覚知」を進めながら「開放の窓」の領域を広げていくことがより深く自身を知る「自己覚知」へと繋がるものである。対人援助職のためのテキストに加え、保育者養成のテキストにも掲載されることのある考え方である。試みに、保育者養成のテキストに掲載されている例を掲出しておこう。

初めて出会うその人が、あなたには考えられないような行動をしたとき（もちろん反社会的ではない）あなたはどのように思いますか？「信じられない！」と思うかもしれません。でも、その人にとつては当たり前前行動かもしれません。その出会いを友達に話したら「その人はおかしくないよ。なぜそんな風に思うの？」と言われました。

なにげないこの出来事も自己覚知につながっています。

- ①初めて出会った人への感情に気付く↓「信じられない！」⇨気づき
- ②その感情を他者へ伝える↓「信じられない！」⇨行動をする人がいた事⇨自己開示
- ③他者からその感情についての指摘を受ける↓なぜそう思うのか、友人はその人の行動に疑問を持たない⇨他者覚知
- ④新たな考え方や価値観について知る⇨自己覚知¹⁵⁾

自己覚知に至る一つのモデルケースということであるが、これに古

典学習の内容を組み合わせると次のようになるだろう。

- ①（現代的視点による）読後の印象、自己の考え⇨気づき
- ②（現代的視点による）自己の考えの言語化⇨自己開示
- ③（作品成立期の読みや時代背景に根差した）授業者からの解説⇨他者覚知
- ④（自己の考えと授業者からの解説をふまえ）現代的視点にのみ根差した自己の読みや考え方に依拠しては作品成立期における理解（他者の視点）に近づけないという認識↓新たな視点・価値観について知る⇨自己覚知

②については、近年、様々な授業で実施されているリフレクシヨン・シートを用いることで容易に実現可能である。また③は、本来的には①と並行して行われるものであろうが、②における自己の考えの言語化の場面でも同時に言語化された形で示されるものである。これらの手続きを経て、④の自己覚知に至るわけであるが、古典文学を素材にすることで、同じものを前提にしながら自己と作品成立期の読者の読みに落差があることを知ることができ、いかに自身の読み方、考え方が作品成立期のありようを無視した現代的視点にのみ依拠したものであったかを実感することができるようになるだろう。つまり、古典学習を行うことで、自分は自己の常識の範囲で物事をとらえがちであることを知ることが可能であるということだ。この先に、「相手の立場から考える」という紋切り型の理解ではなく、自己と他者は異なる存在であることについての深い理解、他者を深く知ることの必要性を意識する土壌が保育学生の中に育まれることになるだろう。

五、まとめ

以上、対人援助職たる保育者の養成における子どもや利用者主体の姿勢獲得に向けた自己と他者の差異への気づきと、それをふまえた自己のありようの自覚とについて、古典文学作品の講読が有効性を持つことについて述べてきた。現代に生きる学習者との距離という面で、時間的にも環境的にも隔たりがある古典文学作品の講読は、自身の先入観や現代人の常識に依拠しがちであることを明瞭に映し出すものであるといえよう。そうした性質をふまえた授業実践がなされることで、対人援助職に就こうとする者に求められる客観的なものの見方を醸成していくことができるのではないだろうか。

ここに取り上げた場面以外にも、高校の古文教材として定番化している光源氏による紫の上発見の場面（若紫巻）について考えることもできよう。現代には少女紫の上を発見し、執心する光源氏の姿に小児性愛的なものを読み取る読者がいるが、平安期の年齢の感覚との間には大きな開きがあることは指摘のあるところである。また、「ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。」⁽¹⁾（若紫・二〇七）とあるように、大人になった姿を見てみたい、という光源氏の願望が描かれ、さらには藤壺に似ているがゆえに紫の上に心惹かれるのだという叙述もある⁽²⁾。現代的感覚と作品成立期の感覚に大きな差異があることは、様々な場面で確認ができるだろう。

本稿では『源氏物語』を取り上げたが、他の古典文学作品においても同様の効果は期待できるはずだ。たとえば、『枕草子』の「春はあけぼの」章段の教材利用である。この章段は、近時は小学校高学年の国語科教材にもなっており、中学や高校の古文の授業においても定番

教材として用いられていることから、若い学習者にも著明なものだ。吉海直人氏は、『枕草子』といえは、冒頭の「春はあけぼの」章段が一番有名ですね。中学の国語や高校古文の教科書にも必ずといっていいほど採用されており、『枕草子』の代表的章段といっても過言ではありません。そのため、そこには伝統的な日本の四季折々の自然美や風物が鏤められていると思っている人が案外多いようです。みなさんはいかがですか？しかしながら、それは明らかに誤解でした。本来、春の風物としては「梅・鶯・桜・霞」などがあげられてしかるべきだからです。そこに「あけぼの」が含まれる余地はありません。それにもかかわらず現代人、例えば初めて古典の授業で『枕草子』を習う生徒は、これをすんなり平安時代の美意識として受け取ってはいないでしょう。しかしながら当時の人々は「春はあけぼの」という文章を耳にした途端、少なからず違和感を抱いたに違いないのです⁽³⁾。と述べている。平安朝の常識的な美意識とは異なるものを取り上げたところに『枕草子』の特徴があり、同時代の読者には新鮮味を持って迎えられた文章だとされる。ともすれば、日本の伝統的美意識として処理されがちな叙述であるが、作品成立期にまでさかのぼれば、むしろ新しさがあるものであったのだ。

このように古典文学の学習は、現代的な視点にのみ依拠して読むと、作品成立期そのままの姿を見失いかねないということを学習者に意識させることができるものである。そしてその理解が、自己と他者の関係に置き換えられるとき、自己のありようが見つめなおされ、自己理解が進み、他者理解へと踏み出すことができるようになる。ここに保育者養成における古典文学学習の価値が存する。

和田敦彦氏は、作家自身の内面に到達点を求めない研究手法について述べる中で、「小説をその作者やそれが書かれた時代から切り離して、今の読者の解釈したいように自由に解釈し、評価すべきとする考

え方に直結するべきではない。それはむしろ一番安易であやうい考え方でさえある。むしろ小説の生まれた状況や背景を無視して、読んでいる読者自身の経験や感覚を優先して、小説を解釈することはできない。しかしそのように優先した読者の感覚や経験が、一般性をもつわけでもなければ時代を超えて永続するものでもない。そうした読み方は、その読者の置かれた自らの歴史的な位置からあえて目をそらしただけであつて、自由な読書などとはほど遠い読み方なのだ。」と説く。自己の立ち位置の認識が重要になるのである。

注

- (1) 無藤隆 『3法令改訂(定)の要点とこれからの保育』 (二〇一八年・チャイルド本社・pp.22)
- (2) 前掲注(1) 無藤 『3法令改訂(定)の要点とこれからの保育』 (pp.53)
- (3) 諏訪茂樹 『援助者のためのコミュニケーションと人間関係』 (平成七年・建帛社・pp.i)
- (4) 古川孝順 「社会福祉援助の価値規範——社会と個人の交錯するところ」 『援助するということ』 (古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子著、二〇〇二年・有斐閣・pp.50)
- (5) 前掲注(4) 古川 「社会福祉援助の価値規範」 (pp.46)
- (6) 前掲注(3) 諏訪 『援助者のためのコミュニケーションと人間関係』 (pp.82-83)
- (7) 『源氏物語』本文の引用は、小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』①および②に拠る。なお、引用する際には、末尾に全集の巻数・巻名・掲載ページ数を括弧付きで付す。また、引用文中の傍線は私に付した。
- (8) 三谷邦明 『源氏物語彙糸』 (一九九一年・有精堂・pp.14-18)、山本淳子 『平安人の心で「源氏物語」を読む』 (二〇一四年・朝日新聞出版・pp.57)。三谷氏は、古典常識をふまえれば、この一文中に四つの疑問と二つの想像が生じうることを述べている。
- (9) 前掲注(8) 三谷 『源氏物語彙糸』 (pp.20-21)
- (10) W・E・ヒルの『My Wife and My Mother-In-Law』でも著名な、一枚の絵が若い女性とも老婆とも見て取れるだまし絵的な多義図。
- (11) 福嶋昭治 『「源氏物語」カルチャー講座』 (二〇〇八年・扶桑社・pp.72-73)
- (12) 木村朗子 『女子大で「源氏物語」を読む』 (二〇一六年・青土社・pp.217)
- (13) 小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』②四五〇頁の頭注二は本文中の「知ろしめさぬに罪重くて」の「罪」について、「僧都が事実を帝に知らせず、ために帝が、源氏を実の父親であると知らず、臣下として放置することによって、天罰が帝に下るに至る。その責任上、僧都自身が重罪を得るとの考え。帝自身の、実父を臣従させる重罪と解する説もある。」とする。
- (14) 前掲注(3) 『援助者のためのコミュニケーションと人間関係』 (pp.158-164) および上村麻郁・千葉弘明・仲本美央編著『保育者養成実習事後学習』 (二〇一二年・大学図書出版・pp.9-10) で取り上げられている。
- (15) 前掲注(14)の上村・千葉・仲本 『保育者養成実習事後学習』 (pp.10)
- (16) 前掲注(12) 木村 『女子大で「源氏物語」を読む』では「このくだりについて、光源氏はペドフィリア (paedophilia)、こま

り小児性愛の傾向があるのではないか、あるいはロリコンだというふうに見える人がいます。でもよく考えてみてください。源氏は十二歳で元服、結婚しています。その時点で、いまの年齢の感覚とまったく違いますよね。」(pp.199)、「それに、若紫に惹かれた最大の理由は藤壺に似ているということにあるのですから、藤壺は源氏より五歳年長ですし、それを考えてもロリコンとは言い難いのではないのでしょうか」(pp.200)と述べている。

(17) 吉海直人『古典歳時記』(二〇一八年・KADOKAWA・pp.33-34)

(18) 和田敦彦『読書の歴史を問う』(二〇一四年・笠間書院・pp.227-228)

保育者養成における古典文学教材の価値

— 対人援助職に求められる自己覚知の導入教育 —

高野 浩

The value of learning classical literature in the course of training nursery
teachers and kindergarten teachers

Hiroshi KONO